

7.河川空間の利用状況

7 - 1 河川敷等の利用の現状と課題

(1) 河川空間の概要

富士川の水面利用については、イカダ下りやカヌー、Eボート等がスポーツやイベントの一つとして利用されている。また、富士川水系における直轄区間の高水敷の占用状況は以下に示すように、平成12年度現在で占用地が282.8haになっている。その内訳は、公園緑地、運動場といった施設の利用が134.6ha(47.6%)、農耕地が111.2ha(39.3%)、その他が23.3ha(8.3%)となっている。なお、甲府市内を流れている荒川においては、利用可能な高水敷は約23.8haで、そのほとんどが、公園や運動場として利用されている。

また、富士川では、芝川町の「川カンジー（川勧請）」、南部町の「火祭り」、富士川町の「投げ松明」等の伝統行事が行われている。

富士川の景観は、下流域には、高水敷の緑地公園やスポーツ施設が多く存在しており、開放的な風景が広がっている。中流域は水際での釣りや散策など自然を生かした河川利用がされており、自然の風景と調和している。上流域は信玄堤、万力林など歴史的な治水施設が残っており、これらの施設と一体となった景観となっている。

高水敷占用状況

富士川河川敷占用状況(平成12年度)

河川名		富士川	笛吹川	塩川	早川	日川	御勅使川	合計	
公園・緑地	件数(件)	28	5	0	0	0	0	33	
	面積(m ²)	869,121	150,708	0	0	0	0	1,019,829	
運動場	地方公共団体	件数(件)	14	1	0	2	0	0	17
		面積(m ²)	289,084	2,759	0	11,029	0	0	302,872
	学校	件数(件)	0	1	1	0	0	0	2
		面積(m ²)	0	12,147	11,235	0	0	0	23,382
田畑及び採草地	件数(件)	70	19	0	1	2	0	92	
	面積(m ²)	849,158	239,959	0	19,458	3,715	0	1,112,290	
滑空場	件数(件)	2	0	0	0	0	0	2	
	面積(m ²)	134,725	0	0	0	0	0	134,725	
自動車練習場	件数(件)	1	0	0	0	0	0	1	
	面積(m ²)	2,323	0	0	0	0	0	2,323	
その他	件数(件)	30	1	0	1	0	1	33	
	面積(m ²)	208,482	18,213	0	4,003	0	2,694	233,392	
合計	件数(件)	145	27	1	4	2	1	180	
	面積(m ²)	2,352,893	423,786	11,235	34,490	3,715	2,694	2,828,813	

(出典:甲府工事事務所資料)

(2) 河川敷利用の現状

富士川の年間河川空間利用者総数(平成12年度推定値)は約516万人である。利用者形態別では、スポーツが65%と最も多く、次いで散策等が29%と続き両者で94%を占めている。釣りは4%、水遊びは2%である。利用場所別では、高水敷が89%と最も多く、堤防5%、水際4%、水面2%である。河川利用者は全川を通して施設の利用が多く、高水敷整備の進んでいる河口部、歴史的施設の残っている信玄堤、万力林の周辺は年間を通して利用者が特に多い。

以上のように、富士川は、山間地を流れ、景観に優れ、比較的水質も良く施設の整備された場所でのスポーツ、散策が盛んに行われている。今後も高水敷の自然を利用した整備等により河川空間の利用者は、年々増加して行くものと考えられる。

富士川河川空間利用の状況

区分	項目	年間推計値(千人)		利用状況の割合(平成12年度)
		平成9年度	平成12年度	
利用形態別	スポーツ	595	3,331	
	釣り	52	208	
	水遊び	83	117	
	散策等	1,189	1,506	
	合計	1,919	5,162	
利用場所別	水面	2	112	
	水際	134	214	
	高水敷	1,530	4,606	
	堤防	253	230	
	合計	1,919	5,162	

平成12年度は、秋季・冬季の行事、スポーツイベントが調査日に重なったこと、夏季調査日の天候が晴れだったこと、等により平成9年度調査に比較して利用者数が多かった。

(3) 河川敷等の利用の課題

富士川の河川敷等利用の現状を踏まえ、今後の河川整備にあたっての課題を整理すると次のとおりである。

<富士川の自然に誰もがふれあえる場の整備>

富士川では年間500万人以上の河川利用者がある。川は流域住民にとって最も身近に感じる自然の一つであり、子供から高齢者まで利用できる河川空間の整備が重要である。平成2年に策定された河川環境管理基本計画が富士川の河川敷利用の基本になっている。しかし、河川環境管理基本計画策定後かなり歳月が経っているため、実施に当たっては、治水・利水との調和及び優れた景観の保全に努め、貴重なオープンスペースである水辺空間や河川敷利用など、多様なニーズに対し、自然と共に生きてきた歴史や文化等の地域特性を踏まえ、高齢化社会にも配慮し、人々が川と触れ合い、親しめる河川の整備と保全を行う。

<河川空間を適正に利用するためのルール化等>

河川空間の利用を検討する場合には、自然環境保全、ゴミ、騒音、利用者間の競合を防ぐための調整、事故対策など利用に伴い発生する諸問題への対策についても併せて検討し、適正な河川利用を推進するためのルール化などが課題である。

<地域づくりの軸となる富士川>

富士川では、史跡や文学碑、信仰や民話、信玄堤など数々の歴史文化資源が多くあり、また川の歴史や文化にちなんだ行事・イベント等が多く開催されている。これらの川に関わりのある伝統的な行事を支援していくとともに、流域住民が川に関心を示し集うことにより、地域同士の交流が盛んになり、川を軸として上流から下流までが結ばれるような川と一体となった地域づくりを展開していくことが必要である。

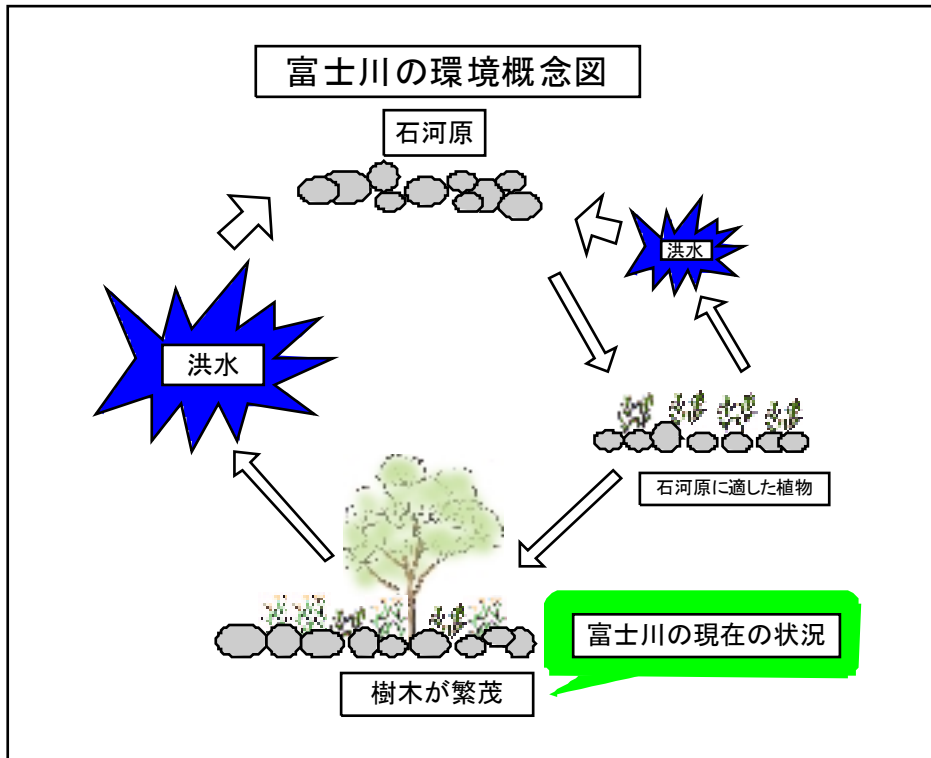
<歴史的施設や山間渓谷美に富んだ優れた景観などの保全>

富士川は信玄堤、万力林、雁堤等の歴史的にも重要な景観資源が数多く点在している。また、富士山に代表される名峰や渓谷と調和した優れた自然景観が見られる。河川改修にあたって、これらの貴重な景観資源を保全し、後世まで伝えるよう配慮していくことが必要である。

7 - 2 自然環境の現状と課題

富士川は平均河床勾配1 / 240の急流河川であり、河床変動が著しく、澁筋が固定せず、洗掘や堆積を繰り返している。

富士川の河川環境は、自然のダイナミズムにより変動の大きな砂礫河原の環境であり、河道内の今ある植生は洪水による流失と回復、繁茂を繰り返し、瀬・淵は洪水毎に位置を変えている。



このように、自然のダイナミズムによって形成される富士川の砂礫の河原は、砂礫地、湿地、樹林地や瀬・淵、崖地など、多様な動植物の生息・生育環境となっている。

富士川の河川環境の現状を踏まえ、今後の河川整備にあたっての主要な課題を整理すると次のとおりである。

<河口部の特徴的な湿地環境の保全>

富士川の河口部では、変化の大きな多列砂州の特徴として、干潟や澁筋にマコモ、ヨシが生育する湿地環境が見られ、キンガヤツリなどの貴重な湿性植物やシギ、チドリ、ガン・カモ類の生息・生育場となっている。マコモ、ヨシの群成と調和を図り、河口部の干潟や澁筋の湿地環境の保全に努めることが必要である。



河口部に見られる周囲をヨシ群落に覆われた干潟



マコモ、ヨシが生育する河口部の湿地環境

<鳥類の集団繁殖地、分布地となる中洲の保全に配慮>

河口部の中洲の砂礫地は、アジサシ類の繁殖地、シギ・チドリ類などの越冬地として鳥類の利用頻度が高く、中洲の保全に配慮する必要がある。



河口部にみられる中洲

<変動の大きな砂礫河原の多様な環境に配慮>

山間部を蛇行して流れる富士川中流部や上流部の釜無川、笛吹川では、多列砂州の河原に広大な砂礫地、樹林地、湿地環境などが見られる。この富士川の砂礫河原の環境の特徴を把握し、多様な動植物の生息、生育環境の保全に配慮する必要がある。



富士川中流部蛇行区間の砂礫河原



笛吹川に見られる水際の湿地環境

<高水敷の利用・整備にあたって河岸の自然環境に配慮>

高水敷の利用、整備にあたっては、動植物の生息・生育環境としての河原との連続性や河岸の自然環境に配慮する必要がある。



整備された高水敷に隣接する富士川河口部のオギ群落などの河原

<重要な崖地や斜面などの自然河岸等の保全>

富士川中流部は、崖地や河畔林をもつ山付き区間が多く、カワセミ、チョウゲンボウなどの営巣やサツキ、シランなどの貴重な植物の生育地となっている。

また、堤防の石張法面の箇所には、貴重な植物のツメレンゲが生育している。このような崖地や斜面等の自然河岸等の保全に配慮する必要がある。



富士川中流部に見られる崖地や河畔林の自然河岸

<魚類等の遡上や産卵に適した清流と瀬・淵の保全に配慮>

山間部を流れる富士川中流部の蛇行区間や上流部の釜無川、笛吹川には、瀬と淵が連続する区間が多く、清流の礫質河床を産卵場とするカワヨシノボリ、カジカや、瀬を産卵場とするアユ、ウグイなどの魚類が多く生息している。

また、下流部では清流河川を好んで遡上するシロウオが確認されており、清流と瀬・淵の保全に配慮する必要がある。



瀬と淵が連続する富士川中流部の河道

<渇水時等の現状>

扇状地を流れる釜無川は伏流が多く、渇水時に瀬切れが発生する区間が見られる。



平成6年8月渇水時の釜無川の瀬切れ状況

<支川・小川との連続性の確保>

笛吹川で多く確認されているメダカは、本川や支川、小川など、産卵場となる水草のある水辺を広く利用して維持している魚類であり、湿地環境と本川、支川及び水路等との連続性を図ることが重要である。

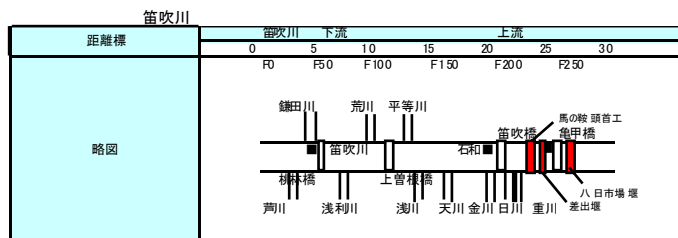
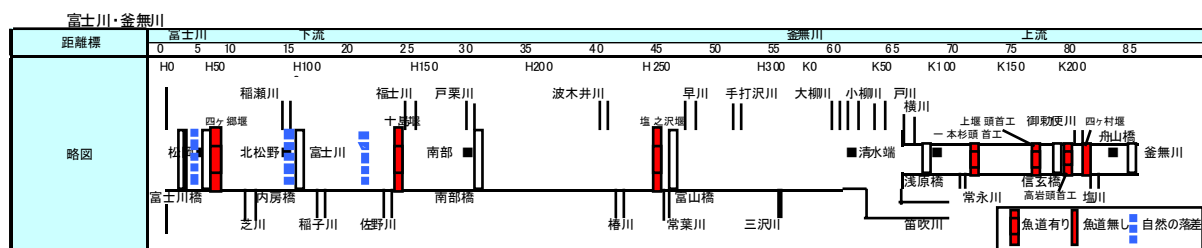


メダカが生息する笛吹川下流部

<魚類等の遡上・降下に配慮した河川管理>

自然豊かな富士川には、アユ、ウグイ、ウナギ等の回遊性魚類が河口から上流釜無川、笛吹川まで広く生息している。富士川では、河床の安定を図る床固工や取水堰などの河川横断施設等が河口から上流まで点在している。これらの河川横断施設には魚道が設置されていない箇所や十分に機能していないため魚類等の移動を阻害している箇所がみられる。

河川を縦断的に移動する魚類等の障害とならないよう、河川横断施設の適正な管理を行い、流水の連続性の確保に努めることが重要である。



富士川・笛吹川における主要な河川横断施設の位置図（直轄管理区間）